

# 梵文和訳『讚法界頌』 52-86偈(承前)

## 加 納 和 雄

本稿は『讚法界頌』(*Dharmadhātustava*)の梵文テキスト(Liu 2015)について試訳と訂正試案を提示するものである。同 1-51 偈を扱った前稿(加納 2015)を承け、52-86 偈を扱う。

『讚法界頌』は 8 世紀頃<sup>1</sup> までには成立していたと考えられ、当初、室利末多訳や不空訳では大乘經典の中で地蔵菩薩が発した偈頌として語られていた<sup>2</sup>。その後、おそらく 9、10 世紀あたりには龍樹に帰されるようになり、『讚法界頌』という名を得て、中観の書としての権威を獲得し、11 世紀頃以降、インド論師たちに引用されるようになったものと推測される。

本作はチベット訳と 3 本の漢訳にもとづいてその研究が主になされてきたが、梵本(Liu 2015)が刊行されたことでその研究は転機を迎えている。梵本は漢訳やチベット訳は同じ作品と言いうるものの、偈頌の順序が大きく異なる箇所もあり<sup>3</sup>、異読も少なくないため、この梵本が諸訳本にとっての唯一の原本であると言うことは決してできない。すなわち、707 年訳出の室利末多訳(部分のみ伝存)、765 年ころに訳出された不空訳、982-1011 年ころの訳出の施護訳、1010-1028 年ころに書写された梵文写本、1053-1064 年ころの訳出のチベット訳、以上の 4 本は『讚法界頌』の発達段階をそれぞれ示す、別々の異本であるといえる。

月輪から始まる一連の先行研究の整理、本作の題名、梵文写本の概要、梵漢

<sup>1</sup> 室利末多訳の訳出年である 707 年が本書の成立下限である。室利末多訳と不空訳では本作は地蔵菩薩による頌として現れ、龍樹の名は現れない。

<sup>2</sup> 室利末多訳では『示所犯者瑜伽法鏡經』とされ、不空訳では『大集經』の中で語られる「法身讚」とされる(『百千頌大集經地蔵菩薩請問法身讚』)。

<sup>3</sup> なお偈頌の順序は、梵本、チベット訳、漢訳 3 本の間で一致せず、月輪、早島、劉、津田などの先行研究によって検討されている。

蔵のそれぞれの特徴、作者などについては前稿を参照されたい。前稿では先行研究に袴谷 1989 を挙げなかったためここに補足させて頂く。近年刊行された津田 2019 は、先行研究を手際よく整理し、チベット文からの和訳を提示する。そこに収録されるチベット文のテキストは、劉氏が使用しなかったプラク版なども校合した、行き届いたものである。

なお本作品を引用するインド撰述文献の一覧リストを前稿で提示したが、ここで Vimalagupta 作 *Śrīguhyasamājalāmkāra* (D1848, 9a3-6) において本作 59-66 偈が引用されることも補足しておきたい<sup>4</sup>。そこに引用される文言は、チベット訳本よりも梵本の内容に一致を見せる箇所が少なくない。

月輪以下の先行訳は全てチベット訳本からの現代語訳であるため、本稿において梵文和訳をなす際、そして梵本の訂正試案を検討する際には、参照するとどめた。梵本とチベット訳本は異本であるため、特に梵文写本に誤写がある場合、チベット訳本の読みのみに基づいて修正することは躊躇される。詳細は下記の校訂の方針において記したい。

## 概要

本稿では 52-86 偈を扱うが、その概要を示すと下記の様になる。左端の数字は梵本の偈番号である。

52-53: ハンサ鳥が乳を取り水を捨てる如くに行者は智を取り無知を捨てる。

54: 無我が洞察されると輪廻生存の種子は滅する。

55: 凡夫は輪廻と涅槃を二極化するが行者は不二とする。

56-58: 界・菩提心は十波羅蜜によって育てられる。

59: 菩薩が生じなければ法身は生じない。

60: 砂糖黍の種がなければ砂糖は生じない。

61: 砂糖黍の種が育て上げられれば砂糖は目前となる。

62: 菩提心が育て上げられれば三乗のさとりは目前となる。

63: 農夫が稲の芽を保護するように仏は初学の菩薩を保護する。

<sup>4</sup> 作者 Vimalagupta の年代はおそらく 11 ~ 12 世紀頃と思われる。訳者の一人 Darma grags は アバヤーカラグプタ (11 世紀後半 ~ 12 世紀前半頃) と同時代の人物であり、作中にはラトナーカラシャーンティ (10 世紀後半 ~ 11 世紀前半頃) の『経集釈』(D3395, 290b-291a ~ D1848, 37b-38a, etc.) からの借用が見られるからである。

- 64-66: 新月前日から満月への月の推移の如く菩薩は十地で次第に満ちて法身に至る。  
 67: 信解行地と発菩提心。  
 68-77: 初地から第十地。  
 78: 転依と法身。  
 79: 法身は不可思議。  
 80: 言語と感官の領域を超えた法身への敬礼。  
 81: 修行を完成した菩薩たちは法性を見る。  
 82-83: 浄められた心は蓮華座に留まる。  
 84: 心汚れた人々は仏を見ない。  
 85: 無知者は仏が存在しないと分別する。  
 86: 仏が寡徳な人々に為し得ることは限られる。

梵本写本は 86 偈 c 句の途中までが回収されており、それ以降を含む貝葉は見つかっていない。チベット訳などと比較するならば梵本はおよそ 101 偈まで存在したと予想されている。

### 梵文校訂の方針

劉氏の梵文校訂本は、問題の多い梵文写本をチベット訳と不空訳に主によりながら訂正を施す意欲的なものである。本稿筆者は劉氏のご厚意によって草稿段階から校訂本を見せて頂き、提起した訂正試案を刊行本に多く反映して頂いた。それでも、難解な箇所は問題を含んだまま残されている。本稿では劉氏の訂正の再吟味を試みる。

本稿に示す訂正試案では写本の読みを優先する。できる限り韻律は正規形 (pathyā) を維持することに努め、場合によっては、やむを得ず仏教混淆梵語の語形によって古典梵語文法から逸脱した語形を採用する (BHSB が拾う用例との時代差の問題は保留)。ただし古典梵語と俗語との使用に一貫性があるわけではなく、むしろ混在しているといつてよい。それゆえ見方によっては、韻律保持を優先するために、本作品の著者が仏教混淆梵語の語形をあえて採用している節さえもみられる。そのいっぽうで中には音節過多で韻律を逸脱する詩脚もあるため、韻律を優先する姿勢が徹底しているとも言い難い。

本稿において目指すのは、不空のみた原典でもなく、チベット訳者のみた原典でもなく、また当梵文写本の筆記者の頭の中にあつた原典でもなく、当梵

文写本の伝承の枠内に限定されつつも、そこから遡りうる限りの、『讚法界頌』作者自身の意図した原典を復元しようとするものである。それによって『讚法界頌』の原形を探究するための基礎作業を目指したい。ただしテキスト自体には変化を繰り返した痕跡が看取され、梵本を一つの異本として捉えようと試みたものの、結果として諸異本のパッチワーク的な形になってしまった箇所が残った。特に龍樹と結び付けられる以前の室利末多訳と不空訳の段階のテキストと、龍樹に帰された後の諸本のテキストとの間には、テキストの読みおよび偈頌の配列において、大きな展開があった可能性がある<sup>5</sup>。先述のように室利末多訳や不空訳を考慮すると、本作品の起源は大乘經典の一節に由来すると考えられるため、単純に一人の作者が造った作品として扱うには慎重を期す必要があり、そのうえ異本ごとに異なる人々の手が加わっている可能性も排除できないため、作品に一貫したスタイルや言語を想定することが躊躇され、不確定要素が多く残される。本稿で提示する校訂試案と試訳は暫定案にすぎず、今後の研究によって深められることを期待したい。

## 凡例

下記に提示するのは、『讚法界頌』の梵文 (Liu 2015) と、それに対する和訳である。使用する略号については前稿末尾の略号一覧を参照されたい。必要に応じ、梵文テキストに対して訂正を施し、試案として提示した。梵文テキスト中の下線は本稿筆者による訂正箇所を示す。脚注に示す梵文の校勘記は、問題のない箇所については劉氏の校訂本のもをそのまま使用し、周辺の情報は割愛した。梵文中に挿入した丸括弧内の数字は貝葉写本の葉番号を示す。和訳に使用した丸括弧 ( ) は本稿筆者が説明的に補足した語句であり、亀甲括弧 [ ] は本稿筆者が文脈上、補足した語句である。

劉氏の梵本に訂正試案を提起する場合は、脚注の校勘記と重複するが、拙訳の下に（訂正試案）と記して、当該詩脚の位置と読みを挙げ、必要に応じて梵文写本と劉氏の読みを並べた。その下には必要に応じて（解説）と記して試案の根拠を挙げた。本稿所掲のチベット訳および漢訳諸本は Liu 2015 所収テクス

<sup>5</sup> たとえば1偈の不空訳では法身への敬礼が説かれるが、チベット訳と梵本では法界への敬礼が説かれるなど、不空訳では「法身讚」という題名が示すように法界よりも法身が主題となっている可能性がある。室利末多訳は末尾部以外未発見であるので冒頭部の詳細は不明であるが、末尾部での不空訳との類似性から冒頭部も類似していたと予想される。

トを依用し、チベット訳は津田 2019 も参照した。

### 梵文テキスト 1-86 偈の訂正試案

梵文テキスト 1-86 偈までの訂正試案一覧を以下にまとめて提示する。1-51 偈の訂正試案については前稿の一部を改稿し再録するものである<sup>6</sup>。左端に偈番号句の位置を挙げ、矢印記号（→）の右側には訂正試案を、or と記した右側には代案を記した。

（左が劉氏の校訂本の読み、右が訂正試案）

9c	sañchannam	→ sañchanna (= Ms)
14cd	bhaksyate amṛtopamā	→ bhaksyante amṛtopamāḥ
16d	sādṛśyaṃ	→ sadṛśam
25c	°vineyārthāya	→ °vinayārthāya (= Ms)
33a	dṛṣṭāntam	→ dṛṣṭāntāv
33c	madhyamā	→ madhyamām
34b	svaccha udaka° ( <i>unmitric</i> )	→ svacche udaka° (= Ms.; Sandhi not applied, cf. 1c, 11c, 14d.)
35c	yasya	→ yasmimś (Ms: yasme)
35c	caivaṃvidhānātmā	→ caivaṃvidho nātmā
38d	prajānatha	or prajānate (conj. Cf. 44c: vijānate yogī)
40a	ghrāṇaṃ	→ ghrāṇa°
40a	ghrāṇi	→ ghrāti
41b	rasadhātur	→ rasadhātor
43a	manaḥ pradhāna°	→ manaḥpradhāna°
45c	ṣaḍāyatanam viśuddham ( <i>unmetric</i> )	→ ṣaḍāyatanaviśuddhir (Ms: ṣaḍāyatanaviśuddhi)
46a	eva	→ etad (Ms: eta)
46b	pratyātma tathatā	→ pratyātmatathatā
48a	kalevare	→ kaḍevare (= Ms. Cf. BHSD s.v.)
51a	bodher dūre sañjñī	→ bodhau dūrasañjñī
51cd	ābhāso yathābhūtam	→ °ābhāsayathābhūta°

<sup>6</sup> 前稿で提示した 24 偈 a 句には誤りを含んでいたため、それを改めて、'nātmā のアヴァグラハを取り、拙訳は以下の様に訂正したい。「法界は、アートマンではなく、女性・男性・中性でもなく、あらゆる執着から自由であるのだから、どうして "アートマンである" などと考えられようか」(dharmadhātur yato nātmā na ca stīrṇapupaṃsakah | sarvagrāhavinirmuktaḥ katham ātmeti kalpyate ||)。松本史朗先生の御教示に感謝申し上げます。

(↑ Kano 2015)

- 55ab parinirvāti śucir nityaśubhālayaḥ → parinirvāṇaṃ śucinīyaśubhālayaḥ  
(Ms: parinirvā śucir nityaśubhālayaḥ)
- 57b cittaṃ pracāritam → cittāpracārātā (Ms: cipracāvratā)
- 57c prajñāyāṃ acalam → prajñāyāḥ sevanam (Ms: prajñāyā sevanam)
- 58c suṣṭhitam → susthitam
- 59a mā bodhisattvān tu vandeti (9 syllables)  
or mā bodhisattvān vandeti  
or bodhisattvā na vandyeti (double sandhi)
- 59c bodhisattvam ajīvaṃ tu → bodhisattve (\*ajāte tu) (Sandhi not applied, cf. 1c, 11c, 14d.)  
(Ms: bodhisattvama =59c, [b]tje tu = 61a)
- 61a (\*rakṣita iksuḥbīje hi) → (\*rakṣita iksu)ḥbīje tu (Ms: bīje tu)  
or (\*rakṣite iksu)ḥbīje tu (Sandhi not applied, metri causa)
- 61b sannidhāyātra → sānnidhyaṃ tatra (Ms: sannidhyaṃ tatra)
- 62b sannidhāyātra → sānnidhyaṃ tatra (Ms: sānnidhyaṃ tatra)
- 63a śālyāṅkurā° → śālyāṅkurā°
- 63c °āśrayā° → °āgrayānā° (c pāda = 9 syllables)
- 67a adhimuktir dṛḍhaṃ → adhimuktir dṛḍhā
- 73c °gambhīrā → °gāmbhīrye (?) (Ms: °gambhītyā)
- 74cd trilokāt tīrṇapaṅkaughair → trailokāt tāra paṅkaughād (Ms: strīrllokāt tāra paṅkaughār)  
(tāra, cf. BHSG 9.8 [f. sg. nom].)
- 76d dharmadeśena → dharmadeśana° (= Ms.; for °deśanā°, metri causa)
- 77a rāmyam → ramyam
- 79ab acintyo vānasād muktaś cintyaḥ saṃsāravāsanah  
→ acintyair vāsanair muktaś cintyaiḥ saṃsāravāsanaiḥ  
(Ms: acintyo vāsanair muktaṃ acintyaḥ saśāravāsanaiḥ)  
(vāsanair, cf. BHSG 9.103 [f. pl. ins.])
- 80ab sarvavāgviśayātītaṃ sarvendriyam agocaram  
→ sarvavāgviśayātītaḥ sarvendriya-m-agocarah
- 81d śūnyaṃ → sūkṣmām (cf. 不空：微細，施護：細微)
- 83b °kalpikam → °kaṇṇikam
- 84a bālas → bāle (Ms: bāla)
- 84c °sattvānām → °santāno (Ms: °sattānam)
- 85a yadā → yathā

## 梵文再校訂テキストと和訳

- 52 yathodakena<sup>7</sup> sammiśraṃ kṣīraṃ ekatra bhā<sub>(4a2)</sub>jane |  
kṣīraṃ pibanti haṃsā hi udakaṃ ca tathā sthitam ||

ちょうど、一つの器の中で牛乳が水と混ざっているとき、じつにハンサ鳥たちはミルク〔だけ〕を飲み、そして水はそのままに残る<sup>8</sup>。

- 53 evaṃ hi kleśasammiśraṃ jñānam ekatra bhājane |  
pibanti yogino jñānam ajñānaṃ sphorayanti te ||

おなじように、一つの器の中で智が煩惱と混ざっているとき、行者たちは智〔だけ〕を飲み、そして彼らは無知を吐き捨てる。

- 54 ahaṃ mame<sub>(4a3)</sub>tī vā grāho yāvad bāhye<sup>9</sup> vikalpyate |  
drṣṭe viṣayanairātmye<sup>10</sup> bhavabījaṃ nirudhyate<sup>11</sup> ||

「我」や「我の物」といった執着から、外界対象への〔執着〕に至るまでが、〔凡夫によって〕分別される。〔しかし〕認識対象が無我であると見知されたとき、輪廻生存の種子は滅する。

(訂正試案)

54b: bāhye conj. (bāhyo Ms/Liu)

(解説)

54 偈 b 句は写本には bāhya とある。訂正試案 bāhye は、bāhye grāhaḥ を含意するもので

<sup>7</sup> °odakena] em. (Liu), °odakeṇa Ms.

<sup>8</sup> Cf. 3 偈: yathā hi kṣīrasammiśraṃ sarpimaṇḍaṃ na drṣyate | tathā hi kleśasammiśro dharmadhātur na drṣyate || 「ちょうど乳と混在しているときに、醍醐は見えない。おなじく煩惱と混在しているときに、法界は見えない」。

<sup>9</sup> bāhye] em. (Isaacson), bāhya Ms., bāhyo em. (Liu).

<sup>10</sup> °nairātmye] em. (Liu), °nairātmyem Ms.

<sup>11</sup> nirudhyate] em. (Liu), nirudhyante Ms.

あるが、bāhyo という劉氏の訂正も不可能ではない。また 54 偈 cd 句は、Amṛtākara 作の *Catuḥstavasamāsārtha* においてパラフレーズされる (1v9: drṣṭe ca viṣayanairātmye bhavabṛjāṃ nirudhyate)。ただし引用の形はとっていない。

55 *buddho hi parinirvāṇam*<sup>12</sup> *śucinityaśubhālayaḥ*<sup>13</sup> |  
*kalpayanti dvayaṃ bālā*<sup>14</sup> *adva*<sub>(dad)</sub>*yam yoginām padam* ||

〔輪廻生存の種子が滅したとき〕じつに仏にして、涅槃なる、清浄・常住・善の蔵がある。凡夫たちは〔輪廻生存と涅槃を〕二つのものとして分別するが、行者たちにとって〔輪廻生存と涅槃は〕不二なる境地 / 拠り所である。

(訂正試案)

**55ab:** *parinirvāṇam śucinityaśubhālayaḥ conj.* (*parinirvā śucir nityaśubhālayaḥ Ms, parinirvāti śucir nityaśubhālayaḥ Liu*)

Cf. 不空訳「是佛般涅槃 常恒淨無垢 愚夫二分別 無二瑜伽句」

チベット訳 *gang phyir sangs gyaṃ mya ngan 'das || gtsang ba rtag pa dge ba'i gzhi || gang phyir gnyis ni byis pas brtags || de yi gnyis med rnal 'byor gnas ||*

(解説)

55 偈 ab 句の *parinirvāṇam śucinityaśubhālayaḥ* は訂正試案。写本には *parinirvā śucir nityaśubhālayaḥ* とある。訂正試案は 54 偈 d 句「輪廻生存の種子が滅する」を承けていることを考慮したものであるが、暫定案にすぎない。劉氏は写本の読み *parinirvā* を *parinirvāti* と動詞形に訂正するが、54 偈 d 句との接続が不自然となる可能性がある<sup>15</sup>。また訂正試案 *śucinityaśubhālayaḥ* について、劉氏は写本の読み *śucir nityaśubhālayaḥ* に従うが、*śuci* だけを *nitya* と *śubha* から分離するよりは、*śuci-nitya-śubha* という一組として考えたほうが文脈に適合するため、暫定的に b 句全体を複合語とした<sup>16</sup>。試案は ab 句の早鳥訳「佛・涅槃は、浄・常・

<sup>12</sup> *parinirvāṇam*] em (Kano), *pariṇirvā* Ms, °*pariṇirvā*<ti> em (Liu).

<sup>13</sup> *śuci*°] em (Kano), *śucir* Ms/Liu.

<sup>14</sup> *bālā*] em. (Liu), *bālār* Ms.

<sup>15</sup> なお劉氏は彼の梵文校訂テキストを以下の様に英訳する。Liu 2015: xvii n. 41 “For the Buddha enters *pariṇirvāṇa* (sic), pure, with a fundamental basis that is permanent and good. Spiritually immature people conceive duality. For *yogins*, there is (only) the non-dual abode.”

<sup>16</sup> なお大乘の『涅槃経』、『央掘魔羅経』、『勝鬘経』、『不増不減経』などでは如来蔵や法身の

楽〔・我〕の根拠であり」に近い。

nirvāṇa と buddhatva の関連は 47 偈が述べている (rāgakṣayo hi nirvāṇaṃ dveṣamohakṣayaś ca yat | tasya bodhāya buddhatvaṃ śaraṇaṃ sarvadehinām || 「貪瞋痴の寂滅という涅槃を覚るためには、仏の境地が、あらゆるいきものにとっての寄る辺（帰依処）となる」)。

c 句の dvayaṃ が何を指すのかは偈自体からは必ずしも明瞭ではないが、例えば 10 偈、37 偈、49 偈などを参照すると<sup>17</sup>、輪廻と涅槃の両者を指すと理解しうる。なお d 句は別訳として「行者たちの境地は不二である」ともしうる。

56 duṣkarair vividhair dānaiḥ śīlaiḥ sattvārthasaṅgrahaiḥ |  
sattvopākāraḥśāntiā ca dhātupuṣṭir iyaṃ tridhā ||

為し難い種々なる諸々の布施によって、そして衆生利益を包摂する諸々の戒によって、また衆生を利する忍辱によって界を育むのであり、これは三様である。

(解説)

56-58 偈は十波羅蜜によって界を育むことを説く。その中で 56 偈では布施波羅蜜、戒波羅蜜、忍辱波羅蜜が説かれる。56 偈 d 句の dhātupuṣṭir iyaṃ tridhā は、直後の 57 偈と 58 偈の類似表現を勘案するならば、abc 句に現れる具格を随伴の意味で解釈し、d 句を「これが三つながらにして界を育む」と解釈する余地も残るかもしれない。

57 vīryaṃ ca sarvadharmeṣu dhyāne cittāpracāratā<sup>18</sup> |<sub>(4a5)</sub>  
prajñāyāḥ sevanaṃ<sup>19</sup> nityaṃ bodhipuṣṭir<sup>20</sup> iyaṃ punaḥ ||

形容句として nitya, dhruva, śiva, śāsvata の連句が登場する。

<sup>17</sup> 10 偈「おなじように、きわめて清らかな法界は、煩惱に覆われており、これは輪廻においては光り輝かないが、涅槃においては輝き続ける」。37 偈「[法界もまたおなじように] 煩惱の網によって覆われているときは、「心」と表現されるが、その同じものが煩惱から離れたら「仏」と表現される」。49 偈「菩提は、近くも遠くもなく、去らず来らず、ほかならぬこの煩惱の籠の中では見られず、しかも見られる」。

<sup>18</sup> cittāpracāratā] em. (Kano), cipracāvatā Ms, cittaṃ pracāritam em. (Liu).

<sup>19</sup> prajñāyāḥ sevanaṃ] em. (Kano) : prajñāyā sevanaṃ Ms, prajñāyāḥ acalaṃ em. (Liu).

<sup>20</sup> puṣṭir] em. (Liu), °ṣuṣir Ms.

一切諸法に対して精進すること、禪定において心を散漫にさせないこと、般若において常に奉仕すること。これ（三者）が、さらに菩提を育む。

（訂正試案）

**57b:** *cittāpracāratā conj.* (*cipracāvratā Ms, cittam pracāritam Liu*)

**57c:** *prajñāyāḥ sevanam em.* (*prajñāyā sevanam Ms, prajñāyām acalam Liu.*)

（解説）

57 偈 b 句の *cittāpracaratā* は訂正試案。写本には *cipracāvratā* とあり、劉氏の訂正 *cittam pracāritam* は写本の読みからやや離れ過ぎている。試案 *cittāpracaratā* 「心を散漫にさせないこと」は、施護訳「靜慮令心止」に支持される。

ただし別案として、*cittapracaratā* もありうる。禪定において心を活動させることを示すこの読みの場合は、不空訳「於諸法精進 靜慮心加行 常習於智慧 復得菩提増」、チベット訳 *chos rnam kun la brtson 'grus dang || bsam gtan la sems 'jug pa dang || rtag tu shes rab bsten pa ste || 'di yang byang chub rgyas byed yin ||* と一致する。

57 偈 c 句 *prajñāyāḥ sevanam* は訂正試案。これは写本 *prajñāyā sevanam* の読みにほぼ一致し、チベット訳 *rtag tu shes rab bsten pa ste*、不空訳「常習於智慧」にも支持される。劉氏は写本を *prajñāyām evanam* と読み（誤読か）、さらにチベット訳の異読 *brten pa* を採用し、そのうえで *prajñāyām acalam* という写本から乖離した訂正を提起するが、採用し難い。なお施護訳は「般若用無疑」とする。

58 *upāyasahitā prajñā prañidhānair viśodhitā |*

*baleṣu*<sup>21</sup> *susthitam*<sup>22</sup> *jñānam dhātupuṣṭiś caturvidhā*<sup>23</sup> ||

方便を備えた般若、諸々の誓願によって浄化された〔般若〕、〔十〕力において確立された智。〔方便・願・力・智波羅蜜というこれら〕四者が界を育む。

（訂正試案）

**58c:** *susthitam* (*susṭhita Ms, susṭhitam Liu*)

<sup>21</sup> *baleṣu*] *em.* (*Liu*), *balesva Ms*

<sup>22</sup> *susthitam*] *em.* (*Liu*), *susṭhita Ms, susṭhitam em.* (*Liu*).

<sup>23</sup> *dhātupuṣṭiś caturvidhā*] *em.* (*Liu*), *dhātupuṣṭi caturvidhā Ms*

(解説)

58 偈は方便・願・力・智波羅蜜が界を育むことを説くが、c 句では力波羅蜜と智波羅蜜と一緒に説かれている点で疑問が残る。なお、c 句を津田 2019: 367 のチベット文の和訳「力に対して確固としていること〔と〕知〔とがある〕」のように解釈し、*susthitam* を \**susthitatvam* のような意味で理解するならば、四つの波羅蜜を別々に分けて理解することができる。

59 *mā bodhisattvān vandeti atidurbhāṣitam kṛtam |*  
*bodhisattve (\*ajāte tu dharmakāyo na jāyate)*<sup>24</sup> ||

「汝は菩薩たちを敬うな」という、過度に辛辣な発言が〔ある者たちにより〕なされたが、しかし菩薩たちが生まれなければ、法身は生じない。

(訂正試案)

**59a:** *mā bodhisattvān vandeti conj.* (or: *bodhisattvā na vandyeti: double sandhi*) (*mā bodhisattvān tu vandeti Liu; sa bodhisattvān tu vandeti Ms.*)

**59c:** *bodhisattve (\*ajāte tu) conj.* (*sandhi not applied. cf. 1c, 11c, 14d*) (*bodhisattvam ajīvam tu Liu; bodhisattvama Ms. [bodhisattvama = 59c, bīje tu = 61a]*)

(解説)

59 偈 a 句 *mā bodhisattvān vandeti* は訂正試案 (*ma-vipulā*)。写本には *sa bodhisattvān tu vandeti* とあるが、*sa* は *ma* とも読め、*-n tu* は写本の一部が破損しているため鮮明には見えない。劉氏は *mā bodhisattvān tu vandeti* と訂正するが、一音節過多となる。直前の 58 偈との関係において接続詞 *tu* の必要性は見出し難い。これを省けば、意味と音節数の問題は解決すると暫定的に判断した。試案は不空訳「不應禮菩薩」とも一致する。

なお a 句のチベット訳 *byang chub sems phyag mi bya zhes* とあり、チベット語だけを見るならば「菩提心は礼拝するべからず」とも訳しうるが、梵本、不空訳、下記 D1848 の引用、そして文脈から判断すると、*byang chub sems* は *byang chub sems dpa'* (菩薩) の省略形と解釈しうる。

59–66 偈は Vimalagupta 作 *Śrīsamājālamkāra* に引用され、59 偈は次のようにある (D1848,

<sup>24</sup> 59 偈 c 句の \**ajāte tu* は写本に欠落。チベット訳 (*ma byung bar*) による想定。下記の (解説) を参照。59 偈 d 句は Ms 欠、チベット訳 (*chos kyi sku ni byung ma yin*) からの還梵。66 偈 d 句の *dharmakāyo hi jāyate* などを参照。

9a3). **byang chub sems dpa' phyag bya min || zhes pas shin tu tshig ngan smras || byang chub sems dpa' ma thob na || chos kyi sku ni skye mi 'gyur ||** 太字で示した箇所は \*bodhisattvā na vandyā iti のような原文が想定される。それに従うと、a 句の別案としては bodhisattvā na vandyeti (vandyā iti の double sandhi) も不可能ではないだろう。この別案の vandyeti の部分は写本の vandeti と比較的近い。いっぽうで前半部の bodhisattvā na という案は、写本の sa bodhisatvān tu という読みからやや離れる。

なお菩薩への敬礼は、声聞比丘と大乘比丘とを分け隔てる指標とされることが義浄に紹介される。同様の記述は、バーヴィヴェーカに帰される『タルカジュヴェアラー』、チャンドラキールティの『三帰依七十頌』などにもみられる<sup>25</sup>。これらを参考にするるとこのような「過度に辛辣な発言」は声聞側から発せられたものと予想される。

59 偈 c 句は、写本には bodhisatvamabīje tu、劉氏の訂正は bodhisatvam ajīvam tu とある。劉氏は **bīje tu** の箇所を 59 偈 c 句の一部とみなすが、実際には 61 偈 a 句の一部と考えられる。チベット訳では sa bon に対応する。つまり写本に bodhisatvamabīje tu とあるうち、bodhisatvama まだが 59 偈 c 句の前半であり、その直後の 59 偈 c 句の後半から 61 偈 a 句の前半までの箇所が書き飛ばされており、bīje tu から 61 偈 a 句の後半が続いていると筆者は理解した。つまり 59 偈 c 句後半は梵文が欠落し、61 偈 a 句後半は梵文が回収できるといえる。そのため、上記には梵文欠落部における還元梵文を意味するアスタリスクを 59 偈 c 句後半にも付した（劉氏は 59 偈 c 句について梵本ありと理解した可能性がある）。

筆者による c 句の試案は、bodhisattve ajāte tu (= bodhisattve 'jāte tu の連声不適応形) である。ajāte tu は写本に欠落している理解し、チベット訳 byang chub sems dpa' ma byung bar により梵文を想定した。韻律を優先されるために、-e a- という連続する母音に連声が適用されない形は、例えば 1 偈 c 句 (te aparijñānād)、11 偈 c 句 (gotre asati)、14 偈 d 句 (bhakṣyante amṛtopamāh) などにみられる。また c 句は ab 句と対をなすため、文脈上 c 句の tu は必要である。

59 偈 c 句後半から 61 偈 a 句までの部分が写本に欠損している（書き飛ばされている）ため、対応するチベット訳から和訳した。不空訳は「不應禮菩薩 此爲甚惡說 不親於菩薩 不生其法身」。

60 bur shing sa bon la sdang gang || kha ra spyad par 'dod pa de ||

bur shing sa bon med par ni || kha ra 'byung bar 'gyur ma yin || (梵本欠)

<sup>25</sup> 拙稿「部派と大乘の聖典言語は相関したか—『思釈炎』梵語佚文にみる俗語大乘経—」（『印度学仏教学研究』70-2 収録予定）を参照されたい。

ある者は、砂糖黍の種 (ikṣubīja) を嫌いながらも砂糖 (śarkara) を食べようと欲するが、砂糖黍の種がなければ、砂糖は生じない。

(解説)

60 偈は梵本に欠損するが、内容の上では 59 偈と対をなすため、本来存在していたはずの偈である。チベット訳、不空訳（「憎<sup>26</sup> 於甘蔗種 欲食於石蜜 若壞甘蔗種 無由石蜜生」）、*Śrīguhyasamājālamkāra* にも対応偈が存在するので、何らかの理由で梵文写本に欠落していると判断できる。同偈はチベット訳 70 偈に対応し、劉氏は次のように梵語を想定する。  
\*ikṣubījam hi dvīṣṭe yaḥ śarkarām sa bubhukṣate | abhavaty ikṣubīje hi śarkarāpi na jāyate || c 句の還元は代案として ajāta ikṣubīje tu などとも想定しうる（59–62 偈で√jan があえてくり返し使用された可能性がある）。なお本偈は *Śrīguhyasamājālamkāra* に引用され、cd 句が異なる読みを示し、「砂糖黍の種が損なわれると、砂糖が生じてくる」と説く（D1848, 9a3–4: bur shing sa bon nyams pa yis || sha kar skye ba nyid du 'gyur ||）。

61 (\*rakṣita ikṣu)bīje tu<sup>27</sup> sānnidhyaṃ tatra<sup>28</sup> cintayet |  
guḍaśarkarakhaṇḍānām utpattis tatra jāyate<sup>29</sup> ||

〔収穫時に至るまで〕砂糖黍の種が保護されたとき、そこに〔砂糖の〕近在を思い浮かべられるだろう。〔つまり〕糖蜜 (guḍa)・砂糖 (śarkara)・角砂糖 (khaṇḍa) の生起が、そこ（砂糖黍の種）にある。

(訂正試案)

61a: (\*rakṣita ikṣu)bīje tu conj. (or \*rakṣite ikṣu°) (bīje tu Ms.)

61b: sānnidhyaṃ tatra conj. (sannidhyaṃ tatra Ms, sannidhāyātra Liu)

(解説)

61 偈 a 句前半は梵文写本に欠落するが、同句後半の bīje tu は写本にある<sup>30</sup>。欠落部の想定梵

<sup>26</sup> 「憎」は、異読に「増」とあり、大正藏は「増」を採る。

<sup>27</sup> (\*rakṣita ikṣu)bīje tu] conj. (Kano), bīje tu Ms., (\*rakṣita ikṣubīje hi) Liu.

<sup>28</sup> sānnidhyaṃ tatra] em. (Kano), sannidhyaṃ tatra Ms, sannidhāyātra em. (Liu).

<sup>29</sup> jāyate] em. (Liu), jāya Ms

<sup>30</sup> 59 偈の解説参照。

文はチベット訳 (bur shing sa bon gang bsrung nas) にもとづく劉氏の案 \*rakṣita ikṣu° に従う<sup>31</sup>。この想定は 62 偈 a 句の平行表現 rakṣite bodhicitte に支持される。ただし第 2 第 3 音節において軽音が連続しており、韻律が破綻している。連声をあえて適用しない例が本書には数例あるため (cf. 1c, 11c, 14d)、ここでも \*rakṣite ikṣubṭje と読むことも不可能ではない。

61 偈 b 句 sānnidhyaṃ tatra は訂正試案である。写本の読み sannidhyaṃ tatra を尊重し、劉氏による訂正 sannidhāyātra は採らない。劉氏の訂正はチベット訳 nye bar gnas shing を参考にしていう (Liu 2015: 21 n. 195, n. 198)。劉氏は直後の 62 偈 b 句も同様に写本の読みを大きく変更する訂正を提案するが、採用し難い。少なくとも 61 偈と 62 偈の b 句は梵本がチベット訳とは異なる系統の読みを示しているので一緒にたにすべきではなく、異本として各々個別に処理するのが穏当であろう。

不空訳 61–62 偈は「若護甘蔗種 三種而可得 糖半糖石蜜 於中必得生 若護菩提心 三種而可得 羅漢緣覺佛 於中必得生」としており、両偈の b 句（下線部）については梵本の系統と符合すると解釈することも可能だが、確実なことはいえない。

本偈は *Śrīgūhyasamājālamkāra* に引用され (D1848, 9a4: bur shing sa bon bsrungs pas na || de la nye ba nyid du bsam || bu ram sha kar phye ma nmams || de las skye ba nyid du 'gyur ||)、特に 61 偈 b 句の nye ba nyid du は、sānnidhyaṃ という読みを支持し、梵本とよく一致する読みを示す。

なお 61 偈と 62 偈 d 句の jāyate は、jñāyate へと訂正する余地も残されるが、諸訳には支持されない。jāyate を「起こる」(to take place, to occur) の意味で理解したが、「あり得る」(to be possible) の意味としても理解しうる。

62 rakṣite bodhicitte hi sānnidhyaṃ tatra<sup>32</sup> cintayet |  
arhatpratyekabuddhānām utpattis tatra jāy<sub>(4b2)</sub>te ||

菩提心が保護されたとき、そこに〔さとの〕近在を思い浮かべるだろう。  
〔つまり〕そこ（菩提心）に阿羅漢・独〔覺〕・仏たちの生起がある。

(訂正試案)

**62b:** sānnidhyaṃ tatra conj. (sānidhyaṃ tatra Ms, sannidhāyātra Liu)

<sup>31</sup> Liu 2015: 21 n. 194: \*rakṣita ikṣubṭje hi.

<sup>32</sup> sānnidhyaṃ tatra] em. (Kano), sānidhyaṃ tatra Ms, sannidhāyātra em. (Liu).

(解説)

本偈は *Śrīguhyasamājalāmkāra* に引用される (D1848, 9a4-5: byang chub sems ni bsrungs pas na || de la nye bar bsam par bya || dgra bcom pa dang rang sangs rgyas || de las skye bar 'gyur ba yin ||)。詳細は上記の 61 偈への解説を参照。

63 yathā śālyañkurādīnām<sup>33</sup> rakṣām<sup>34</sup> kurvanti kārṣakāḥ |  
tathāgrayānādhimuktānām<sup>35</sup> rakṣām<sup>36</sup> kurvanti<sup>37</sup> nāyakāḥ ||

ちょうど農夫たちが稲の芽などを保護するように、おなじように教導者（仏）たちは、最勝乗の信解者（菩薩）たちを保護する。

(訂正試案)

**63a:** śālyañkurā° em. (śālyañkurā° Ms, Liu)

**63c:** °āgrayānādhimuktānām conj. (9 syllables) (°āśrayādhimuktānā Ms., °āśrayādhimuktānām Liu)

(解説)

63 偈 c 句の訂正試案 °āgrayānādhimuktānām は一音節過多であり、写本の °āśrayādhimuktānā という読みからやや離れるため、暫定案であり再考の余地が残る。訂正の根拠は、直後の 64 偈 c 句の °āgrayānādhimuktānām という繰り返しの表現がみられる点、直前の 62 偈で阿羅漢・独覚・ブツダが列挙された点、62 偈 c 句の āśraya という表現がやや唐突にみえる点<sup>38</sup>、チベット訳と *Śrīguhyasamājalāmkāra* 所引の c 句が theg mchog の語を保持する点、そして 9 音節の読みが正規の 8 音節の形よりも古い読みである可能性（後に正規化された可能性）が想定される点などを挙げることができる。āgrayānādhimukta は明らかに菩薩を指すため、59 偈の「菩薩を敬うべからず」という非難への回答にもなっている。

<sup>33</sup> śālyañkurā°] em. (Liu), śālyañkurā° Ms/Liu.

<sup>34</sup> rakṣām] em. (Liu), rakṣā Ms.

<sup>35</sup> °āśrayādhimuktānām conj. (Kano; but 9 syllables), °āśrayādhimuktānā Ms., °āśrayādhimuktānām em. (Liu).

<sup>36</sup> rakṣām] em. (Liu), rakṣā Ms.

<sup>37</sup> kurvanti] em. (Liu), kurvantiṃ Ms.

<sup>38</sup> 68 偈、78 偈に āśraya という語が登場し、もしそれらが法界を指すならば、63 偈の梵文写本の読み āśrayādhimuktānā における āśraya も法界を指すと理解できるかもしれない。その場合は、āśraya を āgrayāna に変更しなくても理解は可能かもしれない。

なお *Śrīguhyasamājālamkāra* に見られる引用 (D1848, 9a5: dper na sā lu'i myu gu sogs || so nam pa yis srung bar byed || **de bzhin theg mchog chos rnams kyi** (read: kyi) || gtso bo srung bar byed par 'gyur ||) によると c 句は、例えば \**tathāgrayānadharmānām* と梵文還元しうる（その場合 8 音節に収まる）。*śra* と *gra* は梵文写本における字形が類似するため、その混同により伝承の過程において *tathāgraya-* に対して *tathāśraya-* という異読が生じた可能性はある。そしてこの、チベット訳と D1848 所引中の 63 偈 c 句の *theg mchog* (\**agrayāna*) という表現は、64 偈 c 句にも確認されるため無視できない。なお所引偈中の d 句の *gtso bo* は、梵文の *nāyakāḥ* とは意味の上で一致しない。また不空訳は「如初勝解行 如来必作護」とし、施護訳は「守護菩提種 菩提從此起」とする。

64 *yathā kṛṣṇacaturdaśyām dṛśyate candravigraham |*  
*tathāgrayānā<sub>(4b3)</sub>dhimuktānām<sup>39</sup> dṛśyate buddhavigraham ||*

ちょうど黒分の十四日目には月の姿 (*vigraha*) が〔わずかに〕みられるように、最勝乗を信解する人々（菩薩たち）には仏の姿が〔わずかに〕みられる。

(解説)

64 偈 c 句 *tathāgrayānādhimuktānām* は 9 音節ある。*tathā* を除いて *agrayānādhimuktānām* と訂正すれば音節、韻律ともに問題は解決するが、あえて写本の読みを残す劉氏の案を支持したい。c 句について不空訳は「如初勝解行」とする。本偈は *Śrīguhyasamājālamkāra* に引用される (D1848, 9a5: ji ltar nag po'i bcu bzhi la || zla ba'i lus ni mthong mi 'gyur || de bzhin theg mchog la mos pa || sangs rgyas gzugs ni mthong bar 'gyur ||)。新月直前である黒分の十四日目には月の姿はほぼ見えないので、「わずかに」と補った（チベット訳では *cung zad* とある）。64-68 偈では菩薩の諸地の階梯が月の満ちゆく様に喩えられ、早島 1987: 85 n. 21 には、その典拠のひとつとして『金剛三昧本性清淨不壞不滅経』（大正蔵 15 卷 697c）が指摘される。

65 *yathaiva bālacandrasya dṛṣṭā vṛddhiḥ<sup>40</sup> kṣaṇe kṣaṇe |*  
*tathā bhūmipraviṣṭānām<sup>41</sup> dṛṣṭā vṛddhiḥ<sup>42</sup> kṣaṇe kṣaṇe ||*

<sup>39</sup> °*muktānām*] em. (Liu), °*muktānā* Ms.

<sup>40</sup> *vṛddhiḥ*] em. (Liu), *vṛddhi* Ms.

<sup>41</sup> °*praviṣṭānām*] em. (Liu), °*praviṣṭānā* Ms.

<sup>42</sup> *vṛddhiḥ*] em. (Liu), *vṛddhi* Ms.

ちょうど新月（bālacandra）には、刻々と増大する様が見られるように、〔十〕地に入った〔菩薩〕たちには、刻々と増大する様が見られる。

（解説）

本偈は *Śrīguhyasamājālamkāra* に引用される（D1848, 9a6: ji ltar zla ba gzhon nu nyid || skad cig skad cig 'phel bar mthong || de bzhin sa la zhugs rnam kyis (read: kyi) || 'phel ba skad cig skad cig mthong ||）。

66 yathā hi pañcadaśyām vai pūrṇacandro<sup>(4b4)</sup> hi jāyate |  
tathā niṣṭhāgatābhūmyām<sup>43</sup> dharmakāyo hi jāyate ||

ちょうど〔自分の〕十五日目には満月が生じるように、究竟の地においては法身が生じる。

（解説）

66 偈 c 句について写本には °bhūmiṃ とあり、劉氏は °bhūmyām と訂正する。別案としては °bhūmau と訂正しうる。チベット訳は de bzhin sa yi mthar thug na、不空訳は「如是究竟地」とある。78 偈では法身が転依と関連付けて説かれる。本偈は *Śrīguhyasamājālamkāra* に引用される（D1848, 9a6: ji ltar nges par bco lnga la || zla ba gang ba rnam par mdzes || de bzhin sa yi mthar son pa'i || chos kyi sku ni rnam par mdzes ||）。同所引偈では c 句 mthar son pa'i が属格で表される点で異なる。また bd 句末の jāyate を mdzes と読む点でも異なる。この d 句 mdzes は、チベット訳 d 句の rdzogs shing gsal をあわせて考えると、それらの原本には、梵文の読み jāyate の代わりに bhāsate などの原語があったとも想定されうる。なお不空訳は「法身得而生」と読み、jāyate を支持する。

67 adhimuktir dṛḍhā yasya buddhe dharme ca nityaśaḥ |  
utpādayati tac cittam anivartyam bhave bhave ||

ある人の信解が仏と法に対して常に堅固である場合、〔その人は〕輪廻生存（有）を繰り返しても退転しない、かの心（菩提心）を起こす。

<sup>43</sup> °bhūmyām] em. (Liu), °bhūmiṃ Ms,

(訂正試案)

67a: *adhimuktir dṛdhā conj.* (*adhimukitidṛdha Ms, adhimuktidṛḥam Liu*)

67 偈 a 句 *adhimuktir dṛdhā* は訂正試案。写本の読みは *adhimuktidṛdha*。これを劉氏は *admuktidṛḥam* に訂正する。別訳としては「ある〔心〕の (*yasya*) 信解が仏と法に対して常に堅固である場合、その心は (*tac cittam*)、輪廻生存を繰り返しても退転しないものとして生じる」ともなしうるかもしれないが、*cittam utpādayati* という表現は発心のことを説いていると理解して、上記のように訳した。本偈では修行段階としては信解行地が含まれていると考えられる。本偈から 77 偈までは十地を通じた法界（または菩提心）の浄化が説かれていると考えられる。以下、十地それぞれについての『十地経』における関連記述については早島 1987: 85-87 n. 22-31 を参照されたい。

68 *kṛṣṇāśrayaparā<sub>(4b5)</sub>vṛtṭeh*<sup>44</sup> *śuklāśrayaparigrahaḥ*<sup>45</sup> |  
*tadā tasyāvabodhena muditety abhidhīyate* ||

黒〔分〕という基盤が反転（転依）した後に、白〔分〕という基盤の獲得がある〔場合〕、そのとき、それ（法界）を証得することにより、〔その地は〕「歓喜地」と呼ばれる。

(訂正試案)

°*parāvṛtṭeh conj.* (°*parāvṛtṭih Ms/Liu*)

(解説)

68 偈 a 句の訂正試案 °*āśrayaparāvṛtṭeh* は、チベット訳 *yongs spangs nas* に支持される。写本には °*āśrayaparāvṛtṭih* とある。68 偈 ab 句の「黒」と「白」は、月の黒分と白分のイメージと、それが象徴する黒法と白法とを重ねて示唆していると理解した。転依については後出の 78 偈も参照。

<sup>44</sup> °*parāvṛtṭeh*] *conj.* (Kano), °*parāvṛtṭih Ms/Liu*.

<sup>45</sup> *parigrahaḥ*] *em.* (Liu), *parigraha Ms.*

69 malinaṃ nityakālaṃ hi rāgādyair vividhair malaiḥ |  
malābhāve ca yā śuddhiḥ vimalety abhi<sub>(5a1)</sub>dhīyate ||

〔心は〕常に貪などの種々の垢で汚されている。〔しかしその心は〕汚れがなくなった場合には浄化があり、〔その地が〕「離垢地」と呼ばれる。

70 nirodhāt<sup>46</sup> kleśajālasya prabhābhrājavinirmalā |  
apramāṇāndhakārasya vigatā tu prabhākārī ||

煩惱の網を滅することにより、光により輝きかつ汚れを離れている、無量なる闇を離れた〔地が〕「発光地」である。

（解説）

70 偈 b 句 prabhābhrājavinirmalā は prabhākārī (-bhūmi) を形容する形容詞として理解した。ただし prabhābhrājā vinirmalā と訂正しうる余地もある。なおチベット訳 dri med shes rab rab gsal bas は、**prajñābhrājā** vinirmalā という梵文原文を示唆する。

71 śuddhā<sup>47</sup> prabhāsvarā nityaṃ saṅgajaiḥ parivarjitā |  
jñānārci<sub>(5a2)</sub>ṣaiḥ parivṛtā bhūmir arciṣmatī matā<sup>48</sup> ||

清らかでかつ常に輝き続け、愛着に由来する〔汚れ〕から離れ、智慧の炎によって包み込まれた地が、「焰慧地」と考えられている。

（解説）

71 偈 b 句は、写本には saṅgajaiḥ とある。チベット訳 'du 'dzi によると、samsargaiḥ という異読があったと想定される。b 句は不空訳には「遠離世吉祥」、施護訳には「遠離根随染」とある。

71 偈 c 句、jñānārciṣaiḥ という写本の示す語形について劉氏は、古典文法では jñānārcirbhiḥ とするが仏教混淆梵語としては可能な語形であるため、訂正不要とする (p. xiv, BHSG 16.36)<sup>49</sup>。

<sup>46</sup> nirodhāt] em. (Liu), nirodhoḥ Ms.

<sup>47</sup> śuddhā] em. (Liu), śuddhāḥ Ms.

<sup>48</sup> matā] em. (Liu), matī Ms.

<sup>49</sup> ただしこれを jñānārciṣā (中性、単数の集合的用法、具格) と訂正することも可能かもしれない。

72 sarvavidyākālāśilpa-dhyānānām ca vicitratā |  
durjayānām<sup>50</sup> hi kleśānām<sup>51</sup> vijayā tu sudurjayā<sup>52</sup> ||

〔その地では〕あらゆる学知や技芸や学芸や禪定が彩り豊かであり、〔その地は〕調伏し難い諸煩惱を制圧する〔ので〕、〔それが〕「難勝地」である。

（解説）

72 偈 b 句 vicitratā は写本の読みであり、このままでも文意は通るが、別案としてこれを vicitrīā と訂正して、sudurjayā にかかる形容詞にすることも可能である。

73 tiṣṭhām api bodhīnām<sup>(5a3)</sup> saṅgrahaḥ<sup>53</sup> sarvasampadām<sup>54</sup> |  
utpādavyayagāmbhīrye bhūmis tv abhimukhībhūtā ||

三種（三乗）の菩提、〔およびその他の〕あらゆる完成を集約するものであり、〔諸法の〕生成と滅尽の奥深さに対して現前している地〔が現前地〕である。

（訂正試案）

73c: utpādavyayagāmbhīrye (?) conj. (°gambhīrā Liu; °gambhīyā Ms) Cf. Tib. skye dang 'jig a zab pa la.  
不空「生滅於甚深 名為現前地」、施護「甚深称最勝 般若現於前」

（解説）

73 偈 b 句の写本の読み sarvasampadā（女性、単数、具格）を劉氏は sarvasampadām（女性、複数、属格）と訂正する。劉氏の訂正の場合、sampadām は saṅgrahaḥ の意味上の目的語となり（「一切の完成を集約する」）、その理解はチベット訳 phun sum tshogs kun 'du ba に支持されるので、これに従った。ただし写本の読みのままでも理解は不可能ではない。

73 偈 c 句は、写本には utpādavyayagambhīyā とあり、劉氏は °gambhīrā（生成と滅尽に関して奥深い地）と訂正する。写本の字形 °gambhīya およびチベット訳の対応語 zab pa la を勘案

<sup>50</sup> durjayānām] em. (Liu), durjaśānā Ms.

<sup>51</sup> kleśānām] em. (Liu), kleśānā Ms.

<sup>52</sup> sudurjayā] em. (Liu), sudurjaśā Ms.

<sup>53</sup> saṅgrahaḥ] em. (Liu), saṅgrahaṃ Ms.

<sup>54</sup> °sampadām] em. (Liu), °sāmpadām Ms.

した訂正を求めるならば、*utpādavyayagāmbhūrye* という訂正が一つの候補となるかもしれない。現前地では、苦悩の生成と滅尽の奥深さに関する智慧が現前すると理解したことによる。いづれにしても偈そのものからは、何が「現前」(*abhimukha*) するのかが不明瞭である。いっぽう例えば 8 偈を参照すると法界が現前になるという理解が可能となろう<sup>55</sup>。他の訂正の余地も十分に残されるため、73 偈 c 句についての結論は保留したい。

73 偈 d 句の *abhimukhībhūtā* は内容的には *abhimukhī smṛtā* などとあった方が読みやすい (cf. 74d)。

74 *krīḍate raśmijālena cakravyūhaiḥ samantataḥ*<sup>56</sup> |  
*trailokāt tāra paṅkaughād dūraṅgamā iti smṛtā* ||

〔そこにおいて菩薩が〕あまねく輪の配列をもって、光線の網によって遊戯する〔ところの地は〕、三世の泥の激流（輪廻）から〔人々を〕救い出し、〔その激流から〕遥かに隔てられた〔地、つまり「遠行地」〕と伝えられる。

（訂正試案）

74c: *trailokāt tāra paṅkaughād conj.* (*trilokāt tīrṇapaṅkaughair Liu*; *strīrllokāt tāra paṅkaughār Ms*)

（解説）

74 偈 cd 句、*strīrllokāt tāra paṅkaughār*（または *°aughair*）*dūraṅgamā iti smṛtā* という写本の読みを劉氏は、*trilokāt tīrṇapaṅkaughair dūraṅgamā iti smṛtā* と訂正する。劉氏の訂正の場合、c 句の *tīrṇapaṅkaughair* は、所有複合語となり、b 句の *cakravyūhaiḥ* に掛かることになる（「泥の激流を超越し輪の配列と共に」）。しかしながらこの劉氏の読みは、チベット訳（*'khor ba'i mtsho yi 'dam brgal bas || de la ring du song zhes bya ||*）および空訳「超越欲暴流 名爲遠行地」とうまく対応しない。

上記では写本に最低限の訂正を施して、暫定的に cd 句を *trailokāt tāra paṅkaughād dūraṅgamā*

<sup>55</sup> 8 偈: *dharmadhātur na cotpanno na niruddhaḥ kadācana | sarvakālam asaṅkīṣṭha ādimadhyāntanirmalaḥ* || 「そして法界は、決して、生起することなく、滅することなく、いつでも、汚されずに、初・中・後において垢を離れている」。いっぽう 38 偈では「顕現」(*avabhāsa*) が「不生不滅」(*anutpannāniruddha*) と記される (*cakṣuḥ pratītya rūpaṃ ca avabhāsāḥ sunirmalāḥ | anutpannāniruddhās te dharmadhātum prajānatha* || 「眼〔根〕と色とを縁として、汚れを完全に離れたあらわれがあり、それらは不生不滅である。汝らは法界を直観すべし」)。

<sup>56</sup> *samantataḥ] em. (Liu), samantata Ms.*

iti smṛtā と読んだ。但しその場合一番の問題となるのは、c 句の形容詞 tāra の活用語尾である。この tāra という読みは写本通りの読みである。これを dūraṅgamā に掛かる形容詞として筆者は理解したので、古典文法では tāra となる。tāra はこれに対応する仏教混淆梵語形、つまり ā 語幹女性名詞の単数、主格として類例は確認されている（BHS 9.8）。語末の単音 a は、pathyā 律にあわせたことによるものと解釈しうる。

a 句の cakravayūhair が何を意味するかは判然としない。輪廻の言い換えである可能性も否定できない。

75 buddhaiḥ sa<sub>(s4)</sub>ndhriyamāṇo<sup>57</sup> 'sau praviṣṭo<sup>58</sup> jñānasāgare |  
anābhogavaśīpṛāptaḥ akampyā māra kiṅkariḥ ||

[そこにおいて] 彼（菩薩）が諸仏によって憶念され、智の海に入り込み、身構えることなくして自在力を得ている [ところのその地は]、魔の召使いたちによって揺さぶられることがない [地、つまり「不動地」である]。

76 pratisaṃvitsu sarvāsu<sup>59</sup> sa yogī pāramīgataḥ |  
dharmadeśanasānkathayair<sup>60</sup> bhūmi<sub>(s5)</sub>h<sup>61</sup> sādhumatī smṛtā ||

[そこにおいて] かの行者（菩薩）がすべての [四] 無礙における彼岸に至り、法の説示と解説を具備する [ところの] 地が、「善慧地」と伝えられる。

(訂正試案)

76c: dharmadeśana° (= Ms; dharmadeśena Liu)

(解説)

76 偈 c 句について写本通りの読み dharmadeśana° を保持したい（劉氏は写本の読みを dharmadeśena° と報告するが受け入れがたい）。本来は dharmadeśanā° という語形だが、この末

<sup>57</sup> sandhriyamāṇo] em. (Liu), satvāyamāṇo Ms. Cf. Tib. nges 'di bzung.

<sup>58</sup> praviṣṭo] em. (Liu), praviṣṭā Ms.

<sup>59</sup> sarvāsu] em. (Liu), bharvāsu Ms.

<sup>60</sup> sānkathayair] em. (Liu), sāmkaṭhayai Ms.

<sup>61</sup> bhūmiḥ] em. (Liu), bhūmim Ms.

尾音節 *nā* が韻律の要請によって短音節 *na* になっていると理解できる。本作品は韻律の要請によって通常の語形を、比較的自由に変更している例が数点みられる。たとえば 76 偈 b 句 *pāramīgataḥ* は、韻律の要請により *mi* が *mī* と長音化している（通常は短音 *pārami*<sup>o</sup>）。

77 *kāyaṃ*<sup>62</sup> *jñānamayaṃ* *ramyaṃ*<sup>63</sup> *ākāśam* *iva nirmalam* |  
*sandhārayati buddhānāṃ*<sup>64</sup> *dharmameghā*<sup>65</sup> *samantataḥ* ||

〔そこにおいて〕智よりなり喜ばしく虚空のごとく無垢なる諸仏の御身を、  
〔菩薩が〕あまねく憶念する〔その地が〕「法雲地」である。

（解説）

b 句 *ākāśam iva nirmalam* という定型表現は例えば『大日経』（梵文断簡：*astināstiviyatikrāntam ākāśam iva nirmalam*）カンバラの *Ālokamālā*（244 偈 cd 句：*sūryanirbhinnatimiram ākāśam iva nirmalam*）、その他複数の仏典にみられる。

78 *āśrayaḥ*<sup>66</sup> *sarvadharmānāṃ*<sup>67</sup> *caryāphalaparigrahaḥ* |<sub>(sb1)</sub>  
*āśrayasya parāvṛttir*<sup>68</sup> *dharmakāyo* 'bhidhīyate'<sup>69</sup> ||

一切諸法の基盤〔である法界〕は行と果を集約する。〔その〕基盤の反転（転依）が法身と呼ばれる。

（解説）

78 偈 a 句のチベット訳は *sangs rgyas mams kyi chos kyi gnas*、不空訳は「仏法之所依」とあり、梵本と一致しない。文脈としては 56–63 偈で *dhātu* (= *dharmadhātu*) または *bodhicitta* が育て上げられると法身になることが示唆されていたので、と 78 偈はその議論を承けたものと理解

<sup>62</sup> *kāyaṃ*] em. (Liu), *kāya* Ms.

<sup>63</sup> *ramyaṃ*] em. (Kano), *rāmya* Ms, *rāmyaṃ* em. (Liu).

<sup>64</sup> *buddhānāṃ*] em. (Liu), *buddhānā* Ms.

<sup>65</sup> *dharmameghā*] em. (Liu), *dharmameghāḥ* Ms.

<sup>66</sup> *āśrayaḥ*] em. (Tib. *gnas*), *āśrayaḥ* Ms.

<sup>67</sup> *sarvadharmānāṃ*] em. (Liu), *satvadharmānā* Ms (Liu reads Ms as *sarvadharmānā*).

<sup>68</sup> *parāvṛttir*] em. (Liu), *parāvṛtti* Ms.

<sup>69</sup> 'bhidhīyate] em. (Liu), *vidhīyate* Ms.

し、a 句の āśraya が法界を指すと解釈した。b 句の「行と果」は、これまで述べられてきた十地とその果を指すと理解した。

78 偈 d 句の 'bhidhīyate は、チベット語と不空訳 (brjod pa yin, 「名」) により写本の読み vidhīyate (「規程される」) を劉氏が訂正したもの。ただし訂正をせずに写本のままの形で理解することも不可能ではない。

68 偈では黒分という基盤が反転 (kṛṣṇāśrayaparāvṛtti) して自分となることが説かれており、大乘へと入ることが示唆されていた。いっぽう 78 偈では菩薩が修行を完成して仏になること (法身の獲得) が āśrayaparāvṛtti という語によって示唆されている。この場合の基盤 (āśraya) とは、78 偈 a 句と同じく法界を指すと理解したが、肉体などを意味する可能性も皆無ではない<sup>70</sup>。なお瑜伽行派の āśrayaparāvṛtti では āśraya たる肉体や識に質的転換を伴うが、如来蔵思想における āśrayaparāvṛtti では āśraya たる真如・如来蔵に質的転回が伴わない点で異なり<sup>71</sup>、当該の 78 偈の āśraya が法界を指すならば、後者とモデルと一致する<sup>72</sup>。

79 acintyair vāsanair muktaś<sup>73</sup> cintyaiḥ<sup>74</sup> saṃsāravāsanaiḥ<sup>75</sup> |  
tvam acintyo 'si<sup>76</sup> sarveṣāṃ kas tvā<sup>77</sup> vijñātum arhati<sup>78</sup> ||

[法身なるあなたは] 不可思議なる [微細な] 潜在印象から解放されており、  
可思議なる輪廻の潜在印象から [も解放されている。したがって] あなた  
はあらゆることに関して不可思議である。誰があなたを識別することがで  
きようか。

<sup>70</sup> 例えば48偈を参照 (asmim kadevare sarvaṃ jñānam ajñānam eva ca | badhyate svavikalpena mucyate svaparijñāyā || 「この身体に、知と無知とのすべてがある。自己の分別によって束縛されるが、自己を知悉すれば解脱する」)。

<sup>71</sup> E.g. RGV, ed. Johnston, p. 21: nirmalātathatā sa eva buddhabhūmāy āśrayaparivṛttīlakṣaṇo yas tathāgatadharmakāya ity ucyate, p. 79: tatra katamā nirmalā tathatā. yāsau buddhānāṃ bhagavatām anāśravadhātau sarvākāramalavigamād āśrayaparivṛttir vyavasthāpyate.

<sup>72</sup> ただし袴谷 1989: 199 はこの転依を「唯識説とびつたり符合する」と考える。

<sup>73</sup> acintyair vāsanair muktaś] em. (Kano), acintyo vāsanair muktama Ms., acintyo vāsanā muktaś em. (Liu). Cf. Liu reads Ms. as: acintyo vāsanā muktasa.

<sup>74</sup> cintyaiḥ] em. (Kano), acintyaḥ Ms./Liu.

<sup>75</sup> saṃsāravāsanaiḥ] em. (Kano), saśāravāsanaiḥ Ms., saṃsāravāsaṇaḥ em. (Liu). Cf. Liu reads Ms. as saṃsāravāsanaiḥ.

<sup>76</sup> 'si] em. (Liu), 'ṣi Ms.

<sup>77</sup> tvā] em. (Liu): tva Ms.

<sup>78</sup> arhati] em. (Liu), arhasi Ms.

（訂正試案）

**79ab:** acintyair vāsanair muktaś cintyaḥ saṃsāravāsanaiḥ conj.

(acintyo vāsanair muktam acintyaḥ sasāravāsanaiḥ Ms,

acintyo vāsanād muktaś cintyaḥ saṃsāravāsanah Liu.

Liu reads Ms.: acintyo vāsanā muktasa cintyaḥ saṃsāravāsanaiḥ

不空訳「離不思議熏 及離流轉習」

チベット訳 bag chags las grol bsam mi khyab || 'khor ba'i bag chags bsam du yod ||)

（解説）

79 偈 ab 句は 78 偈で説かれた「法身」が主題となっている。訂正試案は不空訳に基づきつつ、写本の読みを尊重した。その趣旨は、c 句「あらゆることにあなたは不可思議である」ことの根拠として ab 句が「法身がすべてから解放されている」ことを説いていると理解した。つまり不空訳に従うならば、a 句が「不思議熏」を離れていることを教え、b 句が「流轉習」を離れていることを教えている。この場合の「不可思議」とは阿羅漢などの無漏業の習気を指すと解釈した。

文法的な点についていうと、a 句と b 句で二度にわたって写本には °vāsanaiḥ とある。vāsanā は通常、女性形であるのでその具格は単数の場合 vāsanayā、複数の場合は vāsanābhir となるが、ここでは男性、複数、具格と同形の格語尾を示している。この語形（女性、複数、具格をその男性形で表示）は仏教混淆梵語で確認され（BHS 9.103）、本作品にも仏教混淆梵語特有の格変化は部分的に確認されるため（e.g. 71c: jñānārcaṣaiḥ）、単なる筆写上の誤りとは断定し難い。それゆえあえて写本の読みを保持したい。

劉氏の訂正はチベット訳に基づくもので、その意味するところは「潜在印象から解放された〔その法身〕は不可思議であるが、輪廻の潜在印象を持つ〔凡夫〕は思惟の対象である。」といったところであろうか。この場合 b 句の saṃsāravāsanah は所有複合語として理解される。この理解は不可能ではないが、法身が主語として a-c 句を支配すると考えるならば、b 句の cintyaḥ に内容上の不具合が生じる。法身は cintya ではなく acintya だからである。この場合「凡夫」という主語を補わねばならないことになる。

いっぽうで筆者は b 句を cintyaḥ と仮に訂正したが、写本の読み acintyaḥ を保持するならば、「法身であるあなたが」が「不可思議である」という理解となり、その理解もまた成り立つ。ただしその場合 b 句が 1 音節過多となり、また a 句末の muktaḥ（写本は muktam）に連声が適用されないことになる。

80 sarvavāgviṣayā<sub>(sb2)</sub>ātītaḥ<sup>79</sup> sarvendriya-m-agocaraḥ<sup>80</sup> |  
manovijñānagamyo 'si yo 'si yo 'si namo 'stu te ||

[法身たる] あなたは、あらゆる言葉の領域を超えており、あらゆる感官の認識領域となることなく、[ただ] 意識によって認識されるべき御方である。あらゆる者であられる、そのあなたに敬礼する。

(訂正試案)

**80ab:** sarvavāgviṣayāātītaḥ sarvendriya-m-agocaraḥ conj.

(sarvavāgviṣayāātītaḥ sarvendriyam agocaram Ms/Liu)

不空訳「超過諸語境 一切根非境」

チベット訳 ngag gi spyod yul kun las 'das || dbang po kun gyi spyod yul min ||

(解説)

80 偈 ab 句について、劉氏は写本の読み sarvavāgviṣayāātītaḥ sarvendriyam agocaram をそのまま採用するが、その意味するところは文脈にそぐわない。まずこの偈の主語は、c 句に示唆されるように男性形で示される「法身」である。したがって a 句は °viṣayāātītaḥ と訂正される。b 句は、c 句との対で考えるならば法身が一切の感官の対象ではないことを説こうとしているので、sarvendriya-m-agocaraḥ と訂正しうる。このように -m- を hiatus breaker として理解するならば写本の読みはそのままに保持され、訂正は語末の °agocaraḥ のみで済む（写本は °agocaram）。b 句全体は同じく法身を形容する。そしてこの読みは不空訳とチベット訳に支持される。

c 句の写本の読み manovijñānagamyo は、不空訳「意識所取者」とチベット訳 yid kyi shes pas rtogs bya ba に一致するので保持した。しかし内容的には manovijñānagamyo（「意識によって認識されない」とも変更して読むことも可能であろう（ただし pathyā ではなくなる）。というの、梵本 43-45 偈において前五識と意識が同列に扱われているからである<sup>81</sup>。

d 句の yo 'si yo 'si namo 'stu te は、yo 'si so 'si namo 'stu te（「あなたが誰であれ、私はあなたに敬礼する」という、他作品に頻出する読み）に訂正しうる可能性も残されるが<sup>82</sup>、暫定的に

<sup>79</sup> °ātītaḥ] em. (Kano), °ātītaḥ Ms/Liu.

<sup>80</sup> sarvendriya-m-agocaraḥ] conj. (Kano), sarvendriyam agocaram Ms/Liu.

<sup>81</sup> 本書の「意識」については早島 1987: 79 に考察される。

<sup>82</sup> E.g. *Harivaṃśa* 63.8d, *Vāyupurāṇa* 24.164d, *Kūrmapurāṇa* 2.37.114d, *Liṅgapurāṇa* 1.21.89b, etc.

写本の読みを保持した。対応箇所の不空訳は「如所有我體」、チベット訳は **gang yang rung la phyag 'tshal bstod**。

81 krameṇa<sup>83</sup> samudānītā<sup>84</sup> buddhaputrā<sup>85</sup> mahāyaśāḥ<sup>86</sup> |  
dharmameghena jñānena sūkṣmām<sup>87</sup> paśyanti dharmā<sub>(sb3)</sub>tām ||

漸次に〔修行が〕完成した高名な仏子たちは、法雲を有する智を通じて、  
微細なる法性をみる。

(訂正試案 / 代案)

**81d:** sūkṣmām conj. (śūnyam Ms/Liu)

(解説)

81 偈 a 句 samudānītā については、samudānīta gotra (RGV 1.149 ほか) などの用例を参考にし、十地の階梯を順次完成した菩薩を指すと理解した。不空訳は「積集」と訳す。

b 句は写本には mahāyaśo とあるので<sup>88</sup>、mahāyaśāḥ は訂正後の読みとなる。この語形 mahāyaśāḥ (男性、複数、主格) は仏教混淆梵語で確認されている形であり (BHS 16.23)、古典文法では mahāyaśasaḥ に対応する。

81 偈 d 句の sūkṣmām は、文脈および不空訳「微細」、施護「細微」による暫定的な訂正試案。劉氏は写本の読み śūnyam を採用する。確かにこの読みはチベット訳 stong pa によって支持されるが、文脈からは、優れた菩薩たちが特殊な智によって見難い法性をみる、という趣旨が読み取れるため、sūkṣmām という読みがよりふさわしい。そして何よりも、法界は空ではないというのが本書の根本的な哲学であるので (22 偈など参照)、もし śūnyam という読みを採用するならば、それと抵触しかねない<sup>89</sup>。ただし、śūnyam が śūnyatām を意味すると解釈して、

<sup>83</sup> krameṇa] em. (Liu), kramena Ms.

<sup>84</sup> samudānītā] em. (Liu), samudrānītā Ms.

<sup>85</sup> °putrā] em. (Liu), °putrāḥ Ms.

<sup>86</sup> mahāyaśāḥ] em. (Liu), mahāyaśo Ms (Liu reads Ms mahāyaśā).

<sup>87</sup> sūkṣmām] em. (Kano, cf. 「微細」「細微」), śūnyam Ms/Liu.

<sup>88</sup> 劉氏の翻刻 mahāyaśā は訂正を要する。

<sup>89</sup> 無論、劉氏の読みはインドの伝統において存在した読みの一つであり、不可能な読みではない。実際に *Madhyamakaratnapradīpa* における引用によって支持される。D3854, 284a4-5: rim gyis 'jug pa'i sbyor ba yis || sangs rgyas sras po grags chen mams || chos kyi sprin gyi ye shes kyis ||

空性と法界を同義として説いていると理解するならば写本の読み *sūnyam* を採用することも不可能ではない。例えば 43 偈 cd 句 *dharmāṇām niḥsvabhāvatvaṃ dharmadhātur vibhāvīyate* には、諸法が無自性であることが法界として示されているので、空性と法界が同価値のものと示されることに問題はない。場合によっては本作が龍樹と結びつけられるようになったときに、龍樹の空思想の連想により、*sūksmān* が *sūnyam* へと変更された可能性も予想される。

82 *yadā prakṣālitam cittam uttīrṇam<sup>90</sup> bhavasāgarāt<sup>91</sup> |*  
*mahāpadmamayaṃ tasya āsanaṃ sampratiṣṭhātī ||*

心は洗い清められ、輪廻生存の海から抜去される時、大蓮華からなる、その〔心の〕座に〔心は〕安住する。

（解説）

82 偈 c 句 *tasya* は写本の読みを保持した。チベット訳 *de ni* および不空訳「彼」によると、*taca* と読まれていた可能性もあり、*Madhyamakaratmapradīpa* の読みもそれを支持する<sup>92</sup>。

83 *anekaratnapatṭrābhaṃ lakṣaṇojjvalakarnīkam<sup>93</sup> |*  
*anekaiḥ padma<sub>(sb4)</sub>koṭībhiḥ samantāt parivāritam ||*

〔その心蓮華の座は〕あまたの宝石の花弁に光を有し、蓮台において〔三十二〕相によって輝いており、幾億もの〔別の〕蓮華たちによってあまねく取り囲まれている。

（訂正試案）

**83b:** °karnīkam conj. (°kalpīkam Liu, °kalpīkām Ms.)

---

*chos nyid stong pa mthong gyur nas ||*

<sup>90</sup> *uttīrṇam*] em. (Liu), *uttīrṇa* Ms.

<sup>91</sup> *bhavasāgarāt*] em. (Liu), *bhavasāgarān* Ms.

<sup>92</sup> ただし *tat* を *āsanaṃ* に掛ける。D3854, 284a5: *gang tshe sems ni rab bkruṣ pa || 'khor ba'i gzeb las 'das gyur te || pad ma chen po'i rang bzhin gyi | stan de la ni rab gnas 'gyur ||*

(解説)

83 偈 a 句の *anekaratanapatrābhām* は所有複合語で、主語（中性、単数、主格、*cittam* または *āsanam*）を形容する。チベット訳 'od および不空訳「無量寶葉光」に従い、「光を有し」と訳した。

83 偈 b 句の *lakṣaṇojjvalakarmīkam* の末尾 <sup>93</sup>*karmīkam* は、文脈およびチベット訳 *ze'u 'bru can*、不空訳「臺」による訂正試案。なおこれに類似する *ujjvalakesara* という表現は、*Gaṇḍavyūha* (Vaidya ed., p. 260, *sugandharājōjjvalakesarādhyam*) にみられる。写本には *lakṣaṇaujvalakalpikām* とあり、劉氏はこれを *lakṣaṇojjvalakalpikam* と訂正する（「すぐれた相により輝き相応しい」<sup>94</sup>）。なおチベット訳は '*dod par bya ba'i ze'u 'bru can*（「愛らしい花芯をもつ」）、不空訳は「寶光明爲臺」（宝の光明を持って臺となして）とあり、異読を含みながらも、ともに *karmīka* に対応する語をもつ点で共通する。なお同偈は *Madhyamakaratnapradīpa* に引用される<sup>95</sup>。*lakṣaṇojjvalakarmīkam* は文法的には「[32] 相で輝く蓮台を有し」とも訳しうるが、32 大人相で輝くのは蓮台ではなくブツダであるので、処格の所有複合語として理解して上記の様に訳した<sup>96</sup>。

84 *daśabhiś ca balair bāle<sup>97</sup> tiṣṭhate bālacandravat |*  
*kleśair malinasantāno<sup>98</sup> na paśyati tathāgatam<sup>99</sup> ||*

凡夫に対して、〔如来は〕十力を伴い、新月のごとくに〔微妙に〕立ち現れる。  
〔しかし〕諸煩惱に汚された〔心〕相續を有する者は如来を見ることがない。

(訂正試案)

**84a:** *bāle conj.* (*bāla Ms.*, *bālas Liu*)

**84c:** <sup>98</sup>*santāno conj.* (<sup>98</sup>*sattānaṃ Ms.*, <sup>98</sup>*sattvānām Liu*)

<sup>93</sup> *karmīkam conj.* (Kano), <sup>93</sup>*kalpikām Ms.*, <sup>93</sup>*kalpikam em.* (Liu).

<sup>94</sup> 劉氏の訳は次の通り。Liu 2015: xxi n. 50 “(The seat) is characterized by the light of its many jewel petals, which is like fire. It is surrounded by many millions of lotuses on all sides.”

<sup>95</sup> D3854, 284a5–6: '*dab ma rin chen du ma'i 'od || 'dod par bya ba'i ze 'bru can || pad 'dab bye ba du ma yis || nram pa kun du yongs su bskor ||*

<sup>96</sup> たとえば以下の様な複合語分析が想定されうる。*\*lakṣaṇāny ujjvalāni karmīke yasya tal lakṣaṇojjvalakarmīkam*（「あるものの蓮台に [32] 相が輝いているところのもの、それが *lakṣaṇojjvalakarmīkam* である」）。

<sup>97</sup> *bāle] conj.* (Kano), *bāla Ms.*, *bālas em.* (Liu).

<sup>98</sup> <sup>98</sup>*santāno conj.* (Kano), <sup>98</sup>*sattānaṃ Ms.*, <sup>98</sup>*sattvānām em.* (Liu).

<sup>99</sup> *tathāgatam] em.* (Liu), *tathāgataḥ Ms.*

(解説)

84 偈 a 句の *bāle* は暫定的な訂正試案。処格は *viśayasaptamī* の意味で理解した。写本には *bāla* とある。64 偈 (*yathā kṛṣṇacaturdaśyām dṛśyate candravigraham | tathāgrayānādhimuktānām dṛśyate buddhavigraham ||*) では、新学の菩薩にとって如来の姿は、わずかに輪郭しか見えない新月前日の月の姿に喩えられる。84 偈がそれを承けていると理解するならば、新学の菩薩に対応する凡夫にとって、如来の姿は新月の月の如く微かな輪郭のみとして立ち現れると理解できる。

そしてこの理解は、後半の 84 偈 cd 句の内容と鮮やかな対称を成す。つまり凡夫に如来は微かに立ち現れるが、煩惱に汚された衆生は如来を全く見ないことが説かれているといえる。

ここには、如来はいつでも凡夫にも立ち現れているが、無知蒙昧な人は如来をみる事ができないという含意が看取される。この含意は、『華嚴経』「如来性起品」や『撰大乘論』など見られる如来の出現に関する譬喩と共通する<sup>100</sup>。すなわち月輪や日輪は常に光を放ち、その姿は水器の中の澄んだ水面に映るが、水が濁っていれば映らないという譬喩である。

拙訳では内容上、主語に「如来」を補って理解したが、梵本 82-83 偈からの流れを踏まえるならば、主語に、蓮台に安住する心（または法界）を補うことも可能である。自心を月輪に喩えることは仏典に限らず広くインド文学に確認される。その「心」は、82 偈によると洗い清められているので、如来と等しい存在ともいえる<sup>101</sup>。

ただし劉氏の訂正案 *bālas* も許容されうる訂正であり、その場合「そして十力によって、凡夫は (*bāla*) 新月のような状態のまま留まり」と訳すことができる。この理解は同偈のチベット語訳 ab 句「[如来の] 十力によって凡夫たちは新月の如く加持される」とも部分対応する。つまり如来の十力のおかげで凡夫は新月のような状態で留まることを述べていると理解される。新月のような状態というのは、64-67 偈を参考にすると、大乘に入ったばかりの菩薩を指すと理解できる<sup>102</sup>。

なお 84 偈は梵本と漢訳 2 本とチベット訳の間に複数の不一致が見られる。列挙すると以下の如くである。

<sup>100</sup> 高崎 1974: 589-591 参照。『撰大乘論』X.27A[7] には「[仏陀] が現れないのは衆生側の過失による。壊れた器に月が [現れないの] と同様である。[たとえ人々には見えなくとも] それら [仏陀の] 法の光があまねく世間に遍満すること、太陽の如くである」(Cf. *Munimatālamkāra*, Skt Ms. fol. 175v3-4: *yathoktaṃ sattvadoṣān na dṛśyante bhinnabhājanacandravad ityādi*; Śīlabhadra 作 *Buddhabhūmivyākhyā*, D3997, 250b2 からの借用) とある。『宝性論』1.153、『大乘莊嚴經論』IX.16, 53 などにも関連する教説が見られる。

<sup>101</sup> 実際に 83 偈では *lakṣaṇojjvala* (「32 相で輝く」) という表現も見られる。

<sup>102</sup> この段階の凡夫はまだ十力を具えていないため、a 句の具格を「十力を具えて」と訳すことは難しい。

不空訳「彼人現化 安住如水月 煩惱攪擾心 不見於如來」

室利末多訳「諸衆生示神變 猶如明月水中現 邪智生盲惡衆生 佛對面前而不現」

チベット訳 stobs bcu'i stobs kyis byis pa rnam || byin brlabs zla ba tshes pa bzhin || nyon mongs can gyi  
sems can gyis || de bzhin gshegs pa mi mthong ngo ||

ab 句の不空訳は、月が水に映る如くに如来は人々に化現することを説く。室利末多訳は、月が水に映る如くに如来は人々に神変を示すことを説く。「神変」の語はチベット訳の byin brlabs (\*adhiṣṭhita) に対応するが、梵本 b 句の tiṣṭhate とは対応しない。梵本とチベット訳にみられる「十力」の語は両漢訳には無い。また譬喩の「水月」は、梵本とチベット訳では代わりに「新月」(bālacandra) となっている。「水月」は、先述の「如来性起品」所説の月輪（または日輪）と水器の譬喩によく合う。漢訳 2 本は梵蔵と系統が異なるといえる。

84 偈 c 句 malinasantāno は暫定的な訂正試案。チベット訳は nyon mongs can gyi sems can gyis (\*malinasattvah)、不空訳は「煩惱攪擾心」(\*malinasantānaḥ?)、室利末多訳は「邪智生盲惡衆生」。もし劉氏の訂正案のように malinasattvānām と変更するならば、たとえば d 句も na dṛśyate tathāgataḥ のような形にしたほうが読みやすい（その場合「諸煩惱に汚された衆生たちにとって如来は現れない」という意味になる）<sup>103</sup>。しかしそこまでの大きな変更を行うと、写本の読みと大きく離れるため採用し難い。

なお劉氏は c 句を自身の校訂テキスト kleśair malinasattvānām に基づいて「汚れた衆生たちの諸煩惱のせいで（凡夫は仏を見ない）」と理解する<sup>104</sup>。一つの解釈としてはありうるかもしれないが、本作品において malina という表現は具格と共に使用されることが多く、その場合は「垢によって汚された」という意味となる（cf. 20 偈 ab 句: vastraṃ malinaṃ vividhair malaiḥ, 21 偈 ab 句: cittaṃ malinaṃ rāgajair malaiḥ, 69 偈 ab 句: malinaṃ nityakālam hi rāgādyair vividhair malaiḥ）。それらの例と同様、この 84 偈 c 句も kleśair malinasantāno と読み「煩惱によって汚された相続を持つ者は」と理解しておきたい。

85 yathā<sup>105</sup> pretāḥ samantāt<sup>106</sup> tu śuṣkaṃ<sup>107</sup> paśyanti<sub>(sb5)</sub> sāgaram<sup>108</sup> |  
tathaivājñānadagdhānām<sup>109</sup> buddho nāstīti kalpanā ||

<sup>103</sup> 例えば 64 偈 cd 句 tathāgrayānādhimuktānām dṛśyate buddhavigraham など参照。

<sup>104</sup> 劉氏は彼の梵文校訂テキストを以下の様に英訳する。Liu 2015: xviii n. 44: “On account of the ten powers the spiritually immature man stands like the new moon. Because of the defilements of impure beings he does not see the tathāgata.”

<sup>105</sup> yathā] conj. (Kano), yadā Ms/Liu.

ちょうど餓鬼たちが、海を、すっかり干上がっていると〔錯〕視するように、まさに同じように、無知に焼かれた者たちは「仏はいない」と妄分別する。

（訂正試案）

**85a:** yathā conj. (yadā Ms/Liu)

（解説）

85 偈 a 句の yathā は、文脈（tathā に対応）、チベット訳 ji ltar、不空訳「如」、室利末多訳「譬如」による訂正試案。劉氏は写本の読み yadā に従う。yadā を yathā と訂正することは許容されてよいだろう。

86 sattvānām<sup>110</sup> alpapunyānām<sup>111</sup> bhagavān kiṃ kariṣyati<sup>112</sup> |  
jātya(\*ndhasya yathā haste vararatnaṃ hi tiṣṭhate ||)

寡徳なる衆生たちに対して世尊は何をなしえようか。たとえば生盲の人の手に立派な宝石が置かれているようなものである。

（解説）

c 句 jātya までが梵文写本に含まれる文字であり、その後の箇所は梵文写本が見つかっていない。そのため、c 句後半と d 句はチベット訳から筆者が暫定的に想定した梵文である。チベット訳 53 偈 cd は ji ltar dmuṣ long lag pa ru || rin chen mchog ni bzhag pa 'dra || とある。同 cd 句は *Cakrasaṃvarasādhanaṅkā Sarvaśālinī*, D 1407, 146b4–5: ji ltar dmuṣ long lag pa ru || rin chen mchog nyid gzhag pa ltar || に平行偈がある。

<sup>106</sup> samantāt] em. (Liu), samantā Ms.

<sup>107</sup> śuṣkaṃ] em. (Liu), śuṣkāṃ Ms.

<sup>108</sup> sāgaram] em. (Liu), sāgaraḥ Ms.

<sup>109</sup> °dagdhānām] em. (Liu), °dagdhānā Ms.

<sup>110</sup> sattvānām] em. (Liu), satvānātmm Ms.

<sup>111</sup> alpapunyānām] em. (Liu), alpapunyānā Ms.

<sup>112</sup> kiṅkariṣyati] em. (Liu), kiṅkariṣyantih Ms.

## 参考文献一覧

（※前稿と重複するものは割愛し、本稿に追加したもののみを挙げる。）

（略号）

- BHSG *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*. F. Edgerton. New Haven: Yale University Press, 1953.
- conj. conjecture
- em. emendation
- Liu 『讃法界頌』校訂本において劉氏が採用する読み
- Ms. 『讃法界頌』梵文写本
- RGV *Ratnagotravibhāga*. E.H. Johnston (ed.). Patna: Bihar Research Society, 1950.
- \* チベット訳などに基づいて想定により還元した梵文

（論文など）

加納和雄

2015 「梵文和訳『讃法界頌』1-51 偈」『インド論理学研究』8: 177-201 頁。

高崎直道

1974 『如来蔵思想の形成』春秋社。

津田明雅

2019 『ナーガールジュナの讃歌—諸著作の真偽性とあわせて—』起心書房。

袴谷憲昭

1989 「チョナン派と如来蔵思想」『岩波講座東洋思想 11 巻チベット仏教』岩波書店、191-211 頁。

（謝辞 刊行に先立ち『讃法界頌』梵文校訂の資料提供をして頂いた劉震先生、梵文読解に際してご教示を下さったアレクシス・サンダーソン先生、ハルナグ・アイザクソン先生、ディヴァーカル・アーチャルヤ先生、久間泰賢先生の科学研究班の先生方および津田明雅先生に謝意を表します。令和4年度科学研究費 [17K02222] [18K00074] [21K00079] [22H00002] による研究成果の一部）

<キーワード> Dharmadhātustava、梵文和訳と訂正試案、52-86 偈